

六地藏さま 長野県

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おばあさんは、毎日、チャンコチャンコと機織りをして、布をこしらえました。おじいさんは、その布を背負って、町に売りに行きました。そうやって、ふたりは、貧しいながらも仲良く暮らしていました。

ある冬の日のことです。おじいさんは、いつものように布を背負って出かけました。そのうち、寒い空から雪が降りだしました。野原を歩いてしばらく行くと、道端に、お地藏さまが六つ、雪まみれになって立っていました。

「お地藏さま、さぞ寒かろう」

おじいさんは、町に着いて布を売り、そのお金で蓑と笠を六つ買いました。

野原までもどつて来ると、おじいさんは、六地藏さまの雪をはらって、蓑を着せ、笠をかぶせて、家に帰りました。

あくる日の夕方、おじいさんの家の戸をたたく者がありました。戸を開けると、旅人が六人立っていて、

「ひと晩泊めてほしいのだが」といいました。ふたりは、

「何しろごらんのとおりの貧乏で、六人分のふとんもないが、寒いでしょうから、いろいろ端でよければ、お泊りなさい」といいました。旅人たちは、

「それでは、いろいろ端でも借りましょう」といって、中に入りました。そして、

「大釜を借りたいのですが」といいました。おじいさんとおばあさんが大きな釜を出してくると、旅人たちは、お米を二合ほど出して、たいてくれといいます。

「こんな大釜に、二合ばかりのお米でどうなるのですか」とおばあさんがいうと、旅人たちは、

「まあ、見ていてください」といいました。

そのうち、ご飯がたけたようなので、おばあさんがふたを取って見ると、二合ほどと思ったお米は、大釜いっぱいのご飯になっていました。

あくる朝、旅人たちは、泊めてもらったお礼だといって、少しばかりのお米の入ったふくろを置いて、雪の道を帰っていきました。

おじいさんとおばあさんは、ふくろのお米でご飯をたきました。すると、からのふくろは、すぐにまた、いっぱいになりました。ふくろのお米は、食べても食べても少しも無くなりませんでした。おかげで、おじいさんとおばあさんは、一生安楽に暮らすことができました。

旅人が立ち去ったあと、軒の下を見ると、蓑と笠が六人分、置いてありました。野原の六地藏さまが、蓑と笠をかぶせてくれたお礼に来たのだということです。

原話『信濃昔話集』牧内武司著／山村書院

再話…村上郁